



那覇市三重城は宮古・八重山に向かう便船が見渡せる所縁の場所。宮古高女学徒隊の活動について証言をお聞きする。学生たちは沖縄訪問最終日、唯一の自由行動日を聞き取りにあてました

元宮古高女学徒隊

志賀芳さんのお話

て元気に八十二歳まで生きることが出来たのかも
しれません。

私たちが経験したことをお話ししたいと思いま
す。こうして八十二歳になっても元気でいられる
のは卒業式の日、いつもだったら朝十時ごろにあ
った空襲が朝の七時頃にあつたため、卒業式に行
けなかったからです。卒業式に行けないものだけ
ら制服を着て待っていたのですが、空襲が夕方ま
で続きました。学校を見にいった時には影も形も
ないぐらい壊されていました。いつもどおりの空
襲だったら校長先生や先生方も含め、あのときに
みんな死んでいたかもしれません。卒業式の日
空襲が早い時間から始まったために、私はこうし

鏡原の小学校に陸軍病院が入っていました。私
たちはそこに配置され、学校の近くの部落にみん
なで部屋を借り、一部屋に五、六名から七、八名入
りました。その日、私は気分が悪かつたため休ま
せてもらい、部屋で寝ていました。寝ていたら、
ドカーンとすごい音が聞こえました。ビックリし
て飛び起きると私の寝ていた隣に、爆弾の破片が
屋根を突き破って落ちていました。外へ飛び出す
と、近くにあった陸軍病院の炊事場に爆弾が直撃
していました。その破片が屋根を突き破り、私の
寝ていたところの隣に突き刺さっていたのです。
炊事場にいた兵隊さんたちは、直撃だったものだ
から、みんなやられてしまい、腸とか肉とかが炊



足が不自由になられ、立ち続けることができず、跪いて証言をされる志賀芳さん「若い人たちにどうしても伝えておかねばならないことがあります」

事場の隣にあった相思樹（タイワンアカシア）にかか

っていました。外に出た私は、一人で死ぬのは怖い、どうせ死ぬならみんなと一緒に死んだほうがいいと思いました。もう、気分が悪かったのも吹き飛んでしまい、みんなの元へ行きました。

炊事場の兵隊さんたちは軍の命令だからという理由ではなく、私たち女学生にとっても親切にしてくれました。昔、太平洋汁という具ぐなしの汁がありました。炊事場の兵隊さんたちは私たちに親切でしたから、すいとはあ

なくなつてバラバラになっていました。それを見るとき、何とも言えない気持ちになりました。これが一番辛かった思い出です。

でも宮古の方はまだ良かったと思っています。沖縄本島の女学生は同じ女学生でありながら、地上戦で逃げ回ったり、壕から壕へあっちこっち逃げ回ったりしていますからね。私なんかは軍病院のある所、そこだけにいました。特に私の場合は内科で、マラリアの患者さんが多かったため、熱が上がってガタガタと震えたら毛布をかぶせて押さえていたり、体温を測ったり、マラリアの薬を持って行って飲ませたりなど、それぐらいだったので軍病院の中でもとても楽なほうではありません。けれども外科のほうは、切断した足を持って倒れる人もいるぐらいですからね。看護婦の経験

りましたが、具を私たち女学生に入れるようにしてくれていました。その他にも黒砂糖があったら私たちに持ってきていただいたり、とつてもお世話になっていました。そういった人たちがいっぺんにやられ、腸や肉が飛び散っていて、影も形も

もなく、そういうものを初めて見るわけで大変だったと思います。なので、とにかくもう二度と戦争はないように、皆さん方に職場や、結婚してから子供に、昔はこういうことがあったのだよ、というのを教えて、二度と戦争を起さないようにしてほしいというのが、私の願いです。

砂川末子さんのお話

私たちは、女学校四年の時、学校を陸軍の司令部として使うために追い出され、寺小屋のように民家を借りて勉強していました。その寺小屋で午前中は勉強、午後からは看護教育のために軍のトラックに乗せてもらい陸軍病院となっていた鏡原小学校へ行き、そこで講習を受けていました。実



陸軍病院に転用されていた鏡原小学校。友が空襲で倒れたこの地へ、沖繩本島から学生有志を案内してくださった砂川末子さん

女学生は助手として切断する足を持ったり、ローソクを持ったりというようなことをやりました。切断するときに足を持たされたとき私は驚いて卒倒してしまい、手術場から離されることになりました。

した。

それから、カルテ書きもさせられました。このカルテには「体格栄養云々、脈拍いくつ、体温いくつ」という具合に書かれました。

その後、民間の家を借り、外科、内科と別れて三カ所に下宿をしました。当番を決めて自分たちで自炊をしていました。私を含む外科の四名が四〇〇メートルほど離れたところにある井戸に水を汲みに行き、それを使っていました。同級生二人が当番で水くみに行っていたときに、直撃弾が落ちて二人ともやられました。一人は前の岩のほうに落ち、もう一人は飛ばされて畑の真ん中に落ちて脊髄をやられました。その人は終戦後もずいぶん長い間入院していましたが、その後、家で手作業などをして明るく暮らしていました。昔はお



現地を案内してくださった砂川末子さん、垣花梅子さん、小林政子さん（左から）宮古高女学徒隊の3人

地講習で、包帯の巻き方、三角巾の使い方、担架の運び方など、実地訓練をして学びました。戦争が激しくなってきたとき、宮古は沖繩のように地上戦は激しくなかったものの、艦砲射撃を受け、あちこちやられていました。

私たち女学生は陸軍病院外科・内科という風に配置されました。私は外科のほうでしたが、外科で治療をするときに膿盆のうぼんを持ち、兵隊の切断された足をもって、そこからウジ虫が考えられないほど湧いているのを見てびっくりしました。あんなに人間の体にもウジ虫が湧くのかと思うぐらい、もうそれは気持ち悪くて、私たちの幼い心にはシヨッキングで、貧血を起こしたこともあるぐらいです。

私は手術のほうへ回されましたが、手術の時に